

私は道に出た  
歌の糸屑を拾うため  
ピダーラの嘆きを聴くために

(エル・アラサン「栗毛の馬」訳ソンコ・マージュ)

‘ピダーラ’とは人生が音楽の形式になったもの、または人生の歌

ユパンキがくれた名前ソンコ・マージュ、ケチュア語では「心の河」という意味だ。今、ユパンキはアルゼンチンの片田舎で眠っている。墓は小さな石ころが一つだけだ。ただ隣には生涯の友であり同士でもあった人の石ころがもう一つある。人との出会いがどれだけ大切なものか、人との出会いがどれだけのものを生むか、その全ては今ソンコさんの歌声の中にある。ソンコさんの生い立ちはいろいろなところで書かれているので今更ここでは書かないが、音楽をやり始めた頃の一つの出来事、ソンコさんが何を見ているかのヒントになるであろう一つの話を書いておく。

「中学の時音楽会をやって、クラシックですがトリオ（バイオリン、ピアノ、チェロ）を招きました。私は一番前でステージにかじりついて見ていた。バイオリンを弾いていた人、女性ですが履いていたサンダルの紐が切れていて、それが目に焼き付いた。それから6年後、同じバイオリニストの演奏を聴きに行ったら同じ紐が切れたサンダルを履いていたんですね。なにかいろいろな意味で音楽家の側面を見たように思います」

ソンコさんの音楽人生はチェロから始まるが、しばらくするとギターに代わっていく。「ギターとチェロを両方やっていたのですが、私は歌が好きでどうしても歌をやりたかった。チェロは世界最高の音の楽器だと思いますが、チェロだと歌が歌えないんですね、チェロは人間の声に最も近く旋律を弾く楽器で伴奏に向かないんです。それともう一つ手が小さくてチェロには向かないということもあって、ギターの方に行くことにしました」そして26歳の時にセコビアの弟子となる。

その頃からメキシコをはじめとして世界各地で演奏するようになるが、足は自然と南米へと向かっていき、最後はアルゼンチンに辿り着く。

—南米のどこに惹かれたのですか

「それは単純ですね、インディオの音楽が日本の音楽と似ている5音階だったからです、メスティーツが生み出したフォルクローレですね」

そしてその流れは、真っ直ぐユパンキとの出会いへと繋がっていく。

1964年、日本でユパンキと出会う。

「その時の5弦の音が今でも忘れられないですね、こんな温かい包容力のある音があるのかと思いました。他の楽器にはない一音の凄さ、僕はその音がなかなか出なかった」

ユパンキが2度目の来日をした時、ソンコさんは彼の前で演奏をした。

ソンコさんの演奏に、ユパンキはソンコさんがユパンキの演奏を聴いた時に感じた事と同

じ事を感じただろう。帰り際になんと自分のギターをソンコさんにプレゼントしたのだ。ソンコさんはユパンキの一音に、ユパンキはソンコさんの一音に心を囚われたのだ。そしてユパンキは去る時に言った。

「ギターは心（心臓）の前で弾かなければいけない楽器だ」  
ユパンキはフランスの雑誌でのインタビューでこう言っている、  
「日本から帰る時、私はギターが無かった。何故なら日本の有能な音楽家にやったから」  
その後の親交のなかから‘ソンコ・マージュ’の名前が生まれてくる。

「僕には音楽家としての使命がある。まずはユパンキが僕に託していったもの、人間の平等性と寛容性、それは愛といってもいい、それを弾き歌うこと」  
ソンコさんの歌を聴くとき、私はソンコさんの声質の中にそれが含まれていると感じる。その声が私達を魅了するのだ。

「僕は恵まれない人のために音楽をやっていると思う、そして音楽にもものを変える力があるとすれば、心の表現で変えていきたいと思う」

インタビューを終えた後、ソンコさんはユパンキからプレゼントされたギターでカザルスの「鳥の歌」を弾いてくれた。  
この音なのだ、この一音なのだ、と思う。  
この一音の中に、ソンコさんの人生が、ユパンキの心が、カザルスの心が、そして人々の心があると感じる。

そして、その音の中に世界の人々の時を超えた心の流れがある。